



今月号では昨年の「やまびこ欄」への投書を受け、いわゆる「トウバ」と呼ばれる墓参札と紙灯笼について特集しました。教区基幹運動推進委員会・教学伝道部会からの見解を寄稿頂くとともに、市内寺院のご住職からもお話を伺いました。

### 広島市の紙灯笼と、いわゆる「トウバ」の問題について

安芸教区基幹運動推進委員会

教学伝道部会 部長 満井秀城

### 広島独自の習慣

お盆になると色鮮やかな紙灯笼が墓地いっばいに広がる光景は、広島県安芸地方独特の風習のようすです。近年、紙製盆灯笼の代用品として六字名号の木札が用いられるようになってきています。独特の風習ですから、いづれについても本願寺派の法式規範の規程はなく、明確な判断基準はありません。そこで、ここでは教えの上に照らして考えてみることにします。

### いわゆる「トウバ」とは

そのようなことから、もっと手軽なお墓参りのしるしとして六字名号の木札が考案され、近年出回るようになったものと思われまます。まず、この六字名号の木札を「塔婆」と称して販売されていることがあります。また、「塔婆(とうば)」は「卒塔婆(そとば)」の略で、インドの言葉「ストゥーパ」をそのまま漢字にあてたもので、もとは今で言うお墓のことです。ところが真言宗などで五輪塔を平板に彫り込んだものを特

### 広島市の紙灯笼

紙製の灯笼は、価格が安く済みますので、知人や親戚等が墓参りをしたときにお供え代わりのしるしとされるようになってきました。これが慣習として定着すると、たくさん紙灯笼が放置されたま

に「卒塔婆」とか「塔婆」と称してきます。細長い木の板という形状や材質が似ていることから、南無阿彌陀仏の六字を刻印した木の札をこれと同一視して販売業者が「塔婆」と称したのでしょう。

しかし、よく見ていただくとうわかるように、真言宗で用いるものは五輪塔の形状を平面的に写しかえたものですから、丸や三角や四角を重ねた五輪の形になっていきます。五輪とは、五仏を象徴しており、その中に阿彌陀仏も含まれていますが、弥陀一仏に帰依信順する浄土真宗の教えの上からは、阿彌陀仏以外を本尊とはいいたしませんので、五輪塔を意象化した「塔婆」の名称を用いることはふさわしくないと考えまます。

「塔婆」という名称を使わず、仮に「六字の木札」と称した場合でも、問題が生じます。蓮台を描いた本尊の形式にした場合、まず本尊は本山からいただくという原則があります。ご本尊は本山からお受けすべきものです。これは権威の問題ではなく、お姿の正しさとお考えください。そうすると、本山・宗派に無関

係の業者が本山に無許可で製作した本尊類似のものは勧められません。また、六字名号をお墓にお供えし、野ざらしのまま放置して、最後にはゴミとして処理されるようなあり方は、良い方法ではないでしょう。このことは、蓮台を置かない場合でもほぼ同様のことと言えます。

### 香・光・華が

### お供えの原則

紙製の盆灯笼はお灯り・ともしびをお供えするという点では、意義に適合しています。従来から香・光・華がお供えの原則と言えます。ただし、「迎え火」「送り火」と同一視されているのなら問題です。また、お墓参りをしたという名刺代わりの社会儀礼上の意味が濃くなった現状では、実情に応じて代替品を考案するのも一策でしょう。あとの処分のことなどを考慮して、墓地を管理されるお寺さんの事情に応じて、例えばお花代を納めた方に記名の懇志進納木札をお配りするなど工夫の余地は充分あるかと思われま

す。香・光・華の原則に沿って、創意工夫されれば良いものができるかも知れません。

### お念仏申す機縁として

今回の提起を通して、私たち一人ひとりがお墓参りの意義と方法についてしっかりと考え直してみる機会になればと考えています。法式や作法は確かに形式ですが、私たちはとかく「……していいのか」「……してはいけないのか」という方向に話を還元化してしましますが、もう一歩想いを深めてみたとき、法然上人のお言葉として『空善聞書』中に示される次のお言葉が想起されます。

「イハイ・ソトバヲ拝ムハ、輪廻スルモノノスルコトナリ  
ワガアトハ、称名アルトコロ  
スナハチワガアトナリ」  
位牌の中やお墓の下にしていると  
思ってくれるな。お念仏の中に  
いるんだよと言われたこの  
お心に気づくとき、お墓参り  
も「お念仏申すため」を基本  
に、どちらが良いのかという  
形式的な議論よりも、お念仏  
申す機縁となることを第一義  
として受け止めていけるよう  
にしたいものです。

# ご住職に聞いてみました

## 紙灯籠は広島県の風物詩です

広島市中区・圓龍寺 菅 隆雄 住職に聞く

「それぞれのお寺の事情もあり、判断もあるので・・・」と口を開く。多くの墓地が並ぶ境内には「名号板のお供えはご遠慮ください」との張り紙がある。

菅住職は「私のお寺では、紙灯籠のお供えをお願いしています。最近では、お名号の書かれた板をお供えする所も増えてきましたが、そもそも、お名号はお供えするものではないはずですよ」と語る。お名号の書かれた板について「火災の心配がない、管理が楽であること、お参りするの持ちやすいということから用いられるようですが、南無阿彌陀仏のお名号が雨にさらされるのは忍びない」と続ける。



お盆に沢山並ぶ紙灯籠の管理について「一番多い頃で7000本、現在は3500～4000本の紙灯籠が立てられます。かつては、一本、一本抜いて竹の状態にし、農家の方に再利用してもらってました。今は、販売も後片付けも業者にお任せしています」とのこと。

「紙灯籠は、仏さまへの光（色）のお供えです。最近はお参りに来ましたとのあいさつの意味合いも強くなってはいますが・・・。また、送り火・迎え火の思想ともからみ、追善供養のように考えられているのが、もっとも憂うべき問題です。マスコミもお盆を先祖の霊のためのお参りの風景として当たり前のように報道し、社会もそのように認識しつつあるのは困ったことです」と現状を嘆く。

「なぎの時間をさけて、涼しい風が吹き始める時間帯に多くの方がお参りされる姿は、なんとも良い広島ならではの光景です。お墓参りをご縁として、お盆の時期が報恩感謝DAYとして浸透していけばよいのですが」としめくくった。

## 墓参札もお参りの機縁となれば

広島市南区・専立寺 松尾 淳成 住職に聞く

専立寺では10年前から境内墓地への紙灯籠の持込を禁止している。かわりに、下り藤の紋に「俱会一処」（俱會一處）と書かれた木製の札（墓参札）の使用を認める。墓参札は、以前紙灯籠を販売していた業者が門前で販売している。盆の終わりには同じ業者が片付けも行う。

灯籠でのお参りでは、通路が狭いため、あふれんばかりの灯籠で奥まで行くのもひと苦勞。それが今では、「見た目もすっきりし、楽になりました」と、ご門徒さんの評判も上々という。

紙灯籠禁止に至った経緯は、20年前にさかのぼる。当時、火の不始末から灯籠がまとめて燃えた。その時、「次に火がでたら、灯籠の持込を一切禁止します」と宣言。10年間は何事もなかったが、再び灯籠が数本燃えた。「約束どおり来年から一切禁止します」と2度目の宣言。寺報にも書き、立て看板でも告知した。

強い反対はないが、業者の方の依頼と、お参りされる方の「なにかをお供えしたい」という心情も大事にしたいとの思いから、墓参札を考案。名号札には違和感があり、「俱会一処」と法語で作成。墓参札と表示して呼んでいるが、一般に塔婆と呼ばれてしまうので、

いい名前があればとのこと。

「灯籠も木札も必要ないという、本来のお参りの形に戻すことも大切だと思いますが、気持ちを形に表したいという心情、思いも大事にしていきたいです。俱会一処ということばもお参りの機縁となればと思います」と、現場の住職としての言葉だった。

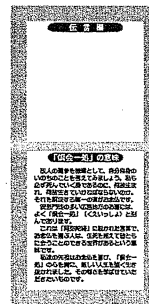
### 市内墓地で参拜時に使われている 各種札（例）

紙製の札

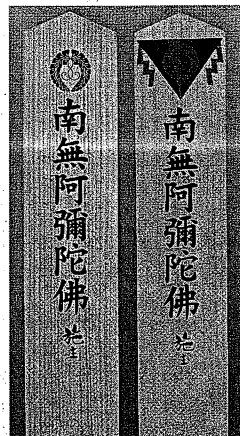
お名号が書かれた札



（表）



（裏）



※裏面には「俱会一処」との法語説明もある



専立寺門前で業社が販売する墓参札